

20056

当院でのOCTガイドPCIの現状

<sup>1</sup>社会医療法人社団カレスサッポロ北光記念病院、<sup>2</sup>社会医療法人社団カレスサッポロ北光記念病院

米田 優一郎<sup>1</sup>、梁川 和也<sup>1</sup>、玉澤 充<sup>1</sup>、山内 良司<sup>1</sup>、野崎 洋一<sup>2</sup>

【目的】SJM社製FD-OCT (ILUMEN) が当院に導入され、オクルージョンバルーンを使用する事なくガイドフラッシュのみで明瞭な画像が得られるようになった。当院でのOCTガイドPCIの現状について報告する。【方法】2012年1月～2012年7月までのPCI、140症例中、OCTガイドPCI、25症例を対象とし病変別、フラッシュ用薬剤の種類別に分けてグループ化を行った。【結果】25症例中、ISR症例10例、新規病変15例、新規病変15例中、フォーカル病変7例、バイファケーション病変6例、LMT病変1例、ACS1例。フラッシュ用薬剤では造影剤 (オイパロミン) 14例、低分子デキストラン溶液11例という結果となった。【結論】従来より使用していたSJM社製TD-OCT (M3) はオクルージョンバルーンのセッティング、フラッシュ用装置の操作、M3の操作に複数の人員が必要であったがILUMENに於いては事前準備が容易になりILUMENの操作を一名で行う事ができる事プルバックスピードの上昇、ガイドフラッシュで血流が除去できるなど夜間やACS、LMT病変にも積極的に使用可能となった。しかし造影剤量の増加、腎機能低下症例に用いている低分子デキストラン溶液は当院では20mlシリンジを使用し、手押しで行っている為か屈曲・蛇行が強い病変では、明瞭な画像が得られない症例も経験した。しかし、セットアップの容易化、プルバックスピードの上昇などIVUSと同じ状況で使う事が可能となり、症例も増加していくと思われる。